当院の休日における血液培養陽性時の運用変更による効果と課題

◎石井 舞[1)]、椎名 倫恵[1)]、市川 真由美[1)]
公立置賜総合病院[1)]

【はじめに】血液培養検査は敗血症の診断･治療において重要な検査であり迅速な結果報告が求められる.当院の休日における血液培養陽性検体は,細菌検査担当者と細菌検査経験者が対応し結果報告を行ってきたが,担当者の業務軽減や速やかなサブカルチャーの必要性を考慮し,2018 年 4 月より宿日直者が対応する運用に変更した.今回我々は,新運用での効果と課題について検証したので報告する.

【休日陽性時の運用】

変更前:細菌検査担当者(3 名)と細菌検査経験者(4 名)が宿日直業務であれば対応,不在時は担当者を呼び出し.

変更後:宿日直者(担当者･経験者含む 23 名)がサブカルチャーまで対応し,その後担当者に連絡して引き継ぐ.

【対象と方法】運用変更前 2017 年 4～12 月と運用変更後 2018 年 4～12 月において,休日に陽性を示した検体についての初回報告(陽性報告･グラム染色結果報告)状況と,最終報告(同定･感受性試験結果報告)状況について調査を行った.尚,最終報告状況の対象検体は,特殊な培養が必要なものは除外した.

【結果】初回報告状況について,2017 年では 1 時間以内:14%,3 時間以内:33%,6 時間以内:59%,2018 年では 1 時間以内:7%,3 時間以内:18%,6 時間以内:33%であった.運用変更後,6 時間以内に報告できた件数が半減しており,初回報告の遅延が認められた.最終報告状況については,2017 年では 24 時間以内:5%,48 時間以内:53%,72 時間以内:91%,2018 年では 24 時間以内:6%,48 時間以内:81%,72 時間以内:94%であった.48 時間以内の報告は,53%から 81%に増加した.

【考察】運用変更により,休日中も停滞せずに検査が進み最終報告までの時間を短縮することに繋がった.更に,担当者の休日呼び出しの緊急度が減少し負担軽減にも繋がった.一方で,グラム染色を担当者のみの業務に制限しているため,初回報告が遅延する傾向が示された.グラム染色は適切な抗微生物薬選択に大きく関わり,患者の早期治療に直結するため,現運用における初回報告の在り方については,臨床や AST 活動と連動しながら運用の改善を図る事が課題と思われた.

連絡先 0238-46-5000(内線 3123)